

福岡

地域福祉活動職員の

まなこ

地域福祉活動推進のために

No. 77

2014年12月発行 福岡県地域福祉活動職員連絡会

地職連を通して 社協ワーカーが 高め合い、つながりあい、支え合う

会長



①宿利幸央/全県、②志免町社協、③7年目、④役員になると多くの社協職員とのつながりや、地域福祉情報を多く得ることができます。怖い組織ではないので是非皆様も積極的に参画してください。(後任いただける方募集中！)

4月18日(金)、クローバープラザにて、福岡県地域福祉活動職員連絡会定期総会を実施。今年度の事業計画と併せ、各ブロックから役員が選出され、承認されました。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

①名前/選出ブロック、②社協名、③社協経験年数、④一言PR

副会長



①ト部善行/筑後ブロック、②筑後市社協、③11年目、④「まなこ」を編集するようになり約8年、全国発送(送り付け商法)させていただいています。皆さんからの反響が、編集者にとっては大変な喜びです。ぜひ感想等お寄せください♪

幹事



①松尾大輔/筑豊ブロック
②直方市社協、③8年目、④あっつあっつの仲間と一緒に切磋琢磨しています。あなたも一人で悩まず、ぜひ地職連の研修に来てください。

幹事



①建部正雄/筑豊ブロック
②香春町社協、③10年目、④今回、トレンディエンジェル枠での選出となりました。仕事に、育児に、育毛に！ジャンジャンバリバリ頑張ります！

幹事



①藤野圭亮/福岡ブロック、
②久山町社協、③7年目、④今年初のハワイ旅行&フルマラソンを経験しました！次は2つ合わせて、ホノルルマラソンに出たいと思います。一緒に参加する方を大募集♪

幹事



①中川史高/両筑ブロック、
②うきは市社協、③2年目、④新人とは思えないふてぶてしさと見た目、フレッシュさが足りない25才です。偉大な先輩役員の皆様にはじられておりますが、地職連はむっちゃ楽しいです！

幹事



①藤本直子/政令市、②北九州市社協、③2年目、④今年から役員になり、ドキドキしながら役員会に参加しています。が、社協の仲間がたくさんいることが実感でき、楽しみでもあります。

サロン支援から個別支援へ、

そして地域に・・・

住民と社協が、住民を支える

- 発表者：高鍋弘美さん・陶山美智子さん・石橋磨紀さん
／広川町社協
 - 助言者：村山浩一郎さん／福岡県立大学 准教授
 - 報告：山崎哲夫さん（宇美町社協）
- と き：2014年5月16日（金）
と ころ：広川町社会福祉協議会

コミュニティワーク研究会 2014 ①



サロン未実施区への働きかけとして、座談会の開催や地域懇談会へ出向き説明するなど奮闘されており、「サロン体験会」を行って肌でサロンのことを感じ取ってもらい新規立ち上げにつなげているようです。

広川町の人口は2万人弱、高齢化率は24.4%。将来の地域の光景が目に見え、交流の場・健康づくりの場であるサロン活動を推進されています。現在35行政区中17地区（平成25年度新規4地区）でサロンを実施。内容は健康の話、レクリエーション、料理、子どもたちの交流など。特に川瀬北地区は、買い物支援もスタートされ3回ほどされているとのこと。

広川町社協の 悩める職員3姉妹



ここ数年継続している「コミュニティワーク研究会」。今年度も県内市町村社協ワーカーの実践事例に耳を傾け、参加者同士で意見交換を行いました。

しかし、サロンを引っ張っていくキーパーソンがいなかったため、体操やレクなどみんなの前でできず、職員に頼ってこられるなど、ぼんやりとしたサロンになってしまっている地区もあるのも現実。どうすれば自分たちの力で動いてくれるのか。課題となっているようです。

「見守りは大事です」に
気持ちがかもっているか。

この日の研修テーマは、①個別支援から地域支援へ、②職員間での情報共有、③組織化した団体への支のあり方、④未実施地区への関わり方。

個別支援は1対1で関係機関と連携しながらでもできます。しかし地域支援へ展開するにはなかなか難しい。そのためにはまず何より、職員の勇気と支援のあり方が問われるのかもしれない。

回りくどいですが、社協だからこのような仕事をしないとけないと漠然と決めつける。「見守りは大事です」。地域で説明するとき、自分の言葉に本当の気持ちが入っているか？

今年NHKで放送されたサイレントプアでは、里見涼が地震で家が壊れ、押し潰された弟を見捨てたことから「誰も見捨てない」と心に決めて、一人ひとりにじっくりと時間をかけて支援しました。うまく地域を巻き込んだこの支援時には涙を流すこともありましたが、そ

れほどの強い思いがあれば、地域に入って動かすことができると思います。

団体支援を考える

担ってもいいことも支援

団体支援をいつまでもしてしまい、自立の方向へなかなか進まない。グループワークでこのような話がありました。たまには行かないこと。当事者団体やボランティアグループなど、進行役の職員がいたら頼ってしまうが、いらないならいなりに自分たちで話を進めているそうです。

「何でもします」「いいよいいよ」ではなく、少しは担ってもらうことも、支援として大切であるようです。

自身がサロンを理解する

そして説明力を持つ

未実施地区でサロンを展開するためには、自分の中でサロンの位置づけをしっかりとっていないければ説明ができません。なぜなのか、サロンを立ち上げることがメインになりがちですが、その先にあることについても理解する必要があります。

そして相手に伝える「説明力」も必要です。たくさん現場を踏んだり、いろいろな趣向を凝らして伝えることが必要だとコメンテーターの村山先生から講義いただきました。

コミュニティワーク研究会 2014 ②

社協はソーシャルアクションをする！ 福祉教育や当事者団体支援から 「声をあげる！」

- 発表者：大川智由さん／みやこ町社協
- 助言者：村山浩一郎さん／福岡県立大学 准教授
- 報告：玉井法子さん（苅田町社協）
 卜部善行さん（筑後市社協）

と き：2014年7月19日（土）
と ころ：みやこ町社会福祉協議会



運動家、代弁者、仲介者…

社協ワーカーの役割

「改めてソーシャルアクションとは？調べてみると『地域住民や当事者のニーズに添えて、社会福祉関係者の組織化を図り、既存の社会福祉制度やサービスの改善、新たに制度やサービスの拡充・創設を目指して議会や行政機関に働きかける組織的な活動』とあり、私たち社協職員の役割は『運動家、代弁者、仲介者等の役割として、また当事者が中心になって組織化を進め活動を展開していく場合には、それらを可能にする条件整備を行うこと』とされています」と大川さんからまず説明がありました。

「移動手段がない」の声

社協内部でも共有

大川さんが説明されたひとつが当事者団体の支援からのソーシャルアクション。ある視覚障害者の「移動手段がない」

移動支援の事業所もなく、家族にお願いするのも気兼ねしてしまう。他の視覚障害者はどうしているのか」という声をきっかけに、視覚障害者の方の集まりを持つようになったとのことでした。それにあたっては、在宅福祉部門のサービスの利用者の中にある視覚障害の方に声掛けをされたとのこと。社協内部でこのように連携・情報共有は大事であることを感じるものでした。

「他の母親と話してみたい」

声掛けすると集まる

さらに、障害児の母親からの「他の母親と話してみたい」という声をきっかけに、地域に呼びかけたところ、25名ほどの方が集まったそうです。「声掛けすると集まるのだなあ」と率直に感じられたそうです。

その中から移動手段の課題が出され、町会議員の協力を得たり、行政の担当課と意見交換をされるなど、取り組みを進められているとのことでした。

課題を抱えている人の声を

聞いているのか

その後グループワークで、それぞれの社協の取り組みを共有したのですが、「そもそも課題を抱えている方の声を聴けているか」「まだ見ぬ当事者の方とつながるうとする姿勢を持っているかが問われる」という話になりました。

研修に参加して・・・

「社協はソーシャルアクションをする団体だ！福祉教育や当事者団体から声をあげる」との題で話し合いました。

当事者団体の支援として、組織を継続していくことが難しい現在、社協としてどのように関わっていくことが必要か。団体としての魅力作りも大切だが、「コミュニケーション力が弱くなっていること」もあり、当事者のそれぞれの悩みに向き合っていく、問題を解決していくことが望まれているのではないかと感じました。福祉教育も同じですが、それぞれ考えることや思いは違います。まず、当事者の事をよく理解し、当事者の思いを知り、当事者に接することが出来る関係作りが必要だと思えました。（玉井法子）

コメンテーターの村山先生からも「組織としてソーシャルアクションをするということになっているか」「地域福祉をどのように位置付けているか。私たちの活動は誰に向けられた活動なのか」「当事者が意見を言える場をつくられているか」「声を挙げるべきは行政だけか」といった投げかけがありました。さらに「当事者の声を行政等に伝えるその伝えた声がどのようになっているかを見届けることが大事」という助言もいただきました。（卜部善行）

菊池正治氏講演会

理論と実践の統合が
地域福祉の発展につながる！

4月18日、県地職連總會終了後、3月末で久留米大学を退官された菊池正治先生をお招きし、講演会を開催。「地域福祉実践の本質と状況を統合する視座」をテーマに社協活動の本質について学びました。(報告 建部正雄/香春町社協)

講師の菊池氏。「官僚主義的に政策に従うのではなく、状況を利用しつつ、生活福祉課題を抱える人々たちを支援していく必要がある」



混乱する社会福祉状況と

背景にある課題

現在、社会福祉を取り巻く状況は混乱している。

そもそも社会福祉は何を目指しているか。社会福祉実践は万能か。マニュアル社会福祉実践の定型化が招く思考放棄の末に到来する問題や、状況批判の論拠は、何かを見つめ直す必要がある。

例えば、「社会福祉の発展には理論が不要であり、役に立たない」として本質論が排除されがちな状況がある。

実践をやみくもに行うだけでは、担当者が状況打開が困難な事態に陥りやすい。本質論不在の指針なき活動は、「ドタバタ、シタバタ」を繰り返す要因となり、結果として自己満足的な実践や問題を放置することにもつながりかねない。

画一化された福祉活動

実践が思考放棄を招く!?

モデルプランがそのまま使われているため、異なる地域であるはずなのに地域福祉活動計画の内容が似通っているような状況がある。また、計画に社会的少数者の声が組み込まれていない傾向も、画一化された福祉活動実践は創造性の欠如状態を招き、思考放棄につながる。マニュアルは私たちに問題対応の一定の方向性を示してくれる。しかし、ガイドライン等への過信的・盲目的従従と全

面的依存は、人間にとって主体性の喪失とも云える危うさを感じる。

先人たちの営みは、自らの思考力や想像力をもって諸困難を克服してきた歴史をもっている。だが、現代社会では歴史的経験や当事者、関係者の蓄積してきた知恵が軽視され、他者の眼差しによって策定された指針やマニュアルが溢れている。安易な計画を実行させないことも、専門家の役割ではないだろうか。

「木を見て森を見ず」になっ
ていけないか

コミュニケーションは、どこに視座を握って活動を展開していくのか。世間一般的な地域福祉実践の状況を見たとき、「木を見て森を見ず」的な対処療法主義の実践が横行していないだろうか。まず、実践の前提として担当地域の状況認識を深めることは重要だと言える。

加えて、地域の理解に向けて、担当地域における人口動態や年齢構成、高齢化率、生活保護・障害者・片親世帯数を調査することは勿論、福祉課題の存在を把握し、分析する必要がある。

併せて、地域社会と地域住民に寄り添う態度は必要不可欠。どのような地域社会を構築しようとするのかといった地域創造への想いを持ち、個人責任論・自助論的な社会福祉から開放していくための実践を展開し、状況に対峙していくことが望まれる。

理論と実践の統合が

地域福祉の発展に!

地域福祉活動実践は、戦前・戦後期そして現代の地域問題に対応することから始まり、変貌する地域社会の状況に応じて対象や方法、目的や原則などが修正され、その時々で意義が確認されながらあるべき姿が構築されていった経緯がある。

実践から理論は生まれ、理論によって実践が客観化され、總体的に意義付けられる。ただし、実践に批判がなければ発展は望めない。そこで、実践を通じて批判の根拠を持つことが大切である。状況に対して批判的な視点を形成していくことは、日々の実践の方向性や実践の有効性の判断、状況に対するより良い社会の実現への思考が可能になる。つまり、理論と実践の統一は地域福祉の発展をもたらすのである。

個人的な感想ですが、講師のお話を聞き、同じ立場のワーカー同士が状況を語り合い、課題認識を深める場をつくっていくことの大切さを強く感じました(主催者の意図とはズレているかもしれませんが、そこはご愛嬌)。

より良い社会の実現に向けて、互いに高め合いつつ、芯を持って地域に潜む課題と向き合っていきたいものです。

(建部正雄)



吃音を考える研修会

吃音当事者の生きにくさを知り、

わたしたち
社協にできることを探る。

8月24日(日)に「吃音を考える研修会」を開催しました。吃音当事者で奈良市社協のコミュニティワーカーでもある後藤文造さんを講師に迎え、吃音当事者の生きにくさを学びました。当日は福岡言友会からも多数参加があり、意見交換・情報交換ができました。(報告 ト部善行/筑後市社協)

私は社会に必要ないの？

自己否定を繰り返していた

物心ついた頃から言いたいことを、うまく言葉にできず伝えられませんでした。子どもの頃は言葉がつかまることを周りに笑われ、「もう言わないでおこう」と人間関係で孤立していました。

学生時代にはアルバイトを一日で解雇されたこともあります。電話で社名を言えませんでした。翌日、「もう明日から来なくていい」と言われました。

コミュニケーションができない人間は社会に必要な存在なのか、自己否定を繰り返していました。また、自分は結婚できるのだろうか、就職できるのだろうか、子どもの頃から悩みました。

吃音の問題は社会の問題

知ることで優しさが生まれる

そんなとき、吃音の人たちでつくる団体「言友会」に出会いました。言友会で自分以外の吃音の人に初めて会い、「今まで、自分だけが苦しい思いをしている」と思っていたのですが、同じように苦勞している人がたくさんいることを知り、「私は一人ぼっちではない」と感じました。

自分は自分で良いのだと、初めて自分を肯定できたのです。

吃音の人への社会的支援は多くはありません。吃音を診る専門機関や専門職は

吃音の基本的理解について、国際医療

福祉大学の安立多恵子先生に講義していただきました。先生は、

「吃音は、はっきりした定義があるわけでもない。大切なのは、本人の生きにくさであり、吃音の自分自身が不便を感じているかどうかということ」



「これまでの研究は、『なぜ流暢に話せないのか?』に焦点が当てられていたが、これからは『周囲の人は、なぜその人の話し方を特別視するのか?』ということに焦点が当てられつつある。吃音の方の生きにくさは、人と人のやり取りの場面の中にある。周りが吃音の人にどう接しているかということが問われるということ」と話されました。

そのためその理解促進も遅れているのでは・と感じました。

思い立ったが吉日で、後藤さんに福岡遠征を依頼。筑後市社協主催の「吃音を考えるセミナー」を行いました。

そして翌日が地職連の研修会、後藤さんの計らいで、福岡言友会からも多数参加をしていただきました。そこで福岡言友会には福岡近郊の方が多く、県南である筑後地区の方は少ないことを教えていただきました。

筑後市にも吃音の方はおられます。前日のセミナーでは、吃音の方の家族の参加もありましたし、後日「実は子どもが吃音で・・・」とセミナーの資料を取りに来られた方もおられました。

筑後市でも何かできないか。そう思っています。研修を研修のままで終わらせないように・・・(ト部善行)

吃音の方の生きにくさを

知ってしまったからには。

「研修を研修のまままで終わらせてはいけませんね」

3月に全国社協職員をつといで後藤さんと出会った時、こんなことを話したと記憶しています。後藤さんが吃音当事者だと知ったのは、後日のことでした。

実はホームレスやひきこもりの方の中に吃音の方も多いということ、人間関係や就職等生活の様々な場面で吃音の方が生きにくさを感じているといったことを知り、見た目では分かりづらい障害であ



新任研修会「社協活動の第一歩を考える」

社協ワーカーが元気であれ！ 未来を信じれるような支援を！

8月29日、クローバープラザで開催した新任・若手研修会。「社協活動の第一歩を考える」というテーマのもと、講義・発表者による実践報告・グループワーク・まとめのお話、の流れで行いました。(報告 中山翔太/志免町社協、卜部善行/筑後市社協)

社協は、地域住民を

元気にしていくところ！

そもそも「社会福祉協議会って何？」という質問に、住民が答えられるでしょうか？民生委員は？行政は？そして、社協職員は答えられますか？

社協活動は分かりにくいです。そして、社協活動を見せるということもあまりしてこなかったかもしれません。

社協とは、私は「地域住民を元気にしていくところ」と思っています。住民ニーズをくみ取り、公的な制度では解決できないことを先駆的に取り組んでいくことで、住民を元気にしていくのです。その時の活動の主体者は住民であり、社協はコーディネートをしていく役割があります。

人を信用しない時代・

共助を見直していききたい

終戦直後、日本には社会福祉に関する法律は無いに等しかったわけですが、今はどうでしょう。数えきれないほどの法



律や制度が生まれていきます。それで全ての国民が幸せになったでしょうか。

自殺、ひきこもり、虐待、孤立といった課題を目の当たりにするたび、公助だけでは幸せにできないと思うのです。

また、かつて助け合いが当たり前にあった時代から、便利な世の中になるにつれ個の時代となり、人を信用しない時代になっていないでしょうか。

そうした時代だからこそ、共助を見直していくことが大事だと思うのです。

「優しさに秀でる」

優秀な社協ワーカーに

人は誰しも幸せになりたいし、納得し

与えられた仕事を

こなすだけではなく

実践報告では、障がいを持つ子どもを対象とした学童保育を行う事業や市民後見人養成の取り組み、徘徊SOSネットワークなどの発表が行われ、各社協の取り組みに対する新鮮さと、事業を円滑に進めていくための地域住民の力の大切さを感じました。私も新人であることを言い訳にせず、一社協職員として地域住民としっかりとした関係づくりを行っていききたいです。

「理想の社協とは？」を考える際に、ただ任せられた仕事をこなしていくだけでは

た生き方を送りたいものです。しかし、長い人生では苦しい時やつらい時もあります。そう考えれば、誰しも福祉課題を抱える可能性があるわけです。

私たち社協ワーカーは様々な事情の住民と接するとき、「きつと幸せになれる」と未来を信じられるような支援や関わりが大切なように思うのです。他人の人生を肯定できるワーカーであってほしいです。

対人援助ができる人間、人の幸せの創造ができる人間になってほしい。「優しさに秀でる」という意味で、優秀なワーカーとして活躍してほしいと思っています。住民の幸せがひいては、自らの幸せになっていくと信じています。

具体的なイメージはできないと思いますが、「この仕事の目的はなにか」、「その業務で地域の人とどう関われるか」など、常に疑問や考えを持つ習慣を身につけることが、新しいアイデアや、仕事への楽しさの発見へとつながっていくのではないかと思う研修でした。

また、新任・若手職員の参加者の意見はとても参考になりましたし、刺激にもなりました。共通の不安を抱えていることもあれば、全く違う視点から物事を捉えていたり、このような地域や担当業務を超えた交流ができる機会は貴重です。次回もまた参加したいと思えます。

(中山翔太)

寄稿

いち社協では難しくても、

近隣社協で集まれば何だってできる!!?

福岡地区地域福祉活動職員連絡会の取り組み

福岡地区地域福祉活動職員連絡会 会長 園木崇嗣 (春日市社協)



似て非なるもの? 目的はほぼ同じだと思っておりますが、「福岡県地域福祉活動職員連絡会(以下、「県地職連」)と字面がすごく似ています。「福岡地区地域福祉活動職員連絡会(以下、「福岡地区地職連」)」。福岡市を除く、福岡都市圏の糸島・宗像・糟屋・筑紫地区、16社協で組織する会です。

もともとは、先輩方が、「福祉活動専門員連絡会」として発足され、県社協も交え、地域福祉とは? コミュニティオーガニゼーションとは? など、夜を徹して喧々囂々の議論をしてきた、熱く、長い歴史があると伺っています(会則の初期発行日は昭和51年1月22日)。

●こんな活動をしています!

1. 課題別研修会(年2回)

昨年は、①ファンドレイジング(資金調達)と②個人情報保護の考え方について。①社協も財源の自立を求められる時代。いかに自主財源を開拓していくべきか、宇美町社協(赤い羽根寄付つき商品の取り組み)や福岡市社協(社協事業への特定寄付の取り組み)の実践報告もいただいたながら、グループワークにて寄付つき商品のアイデアを出し合いました。研修後、宇美町の赤い羽根寄付つき商品に取り組まれている居酒屋さんにて懇親会を行い、交流を深めました。

2. 情報交換会(年1~2回)

今年度は①「共同募金」(募金準備前の6月に実施)、②「実習」(実習生と指導者と一緒に)をテーマに行いました。

①各社協にて事前に作成したワーク

シート(各募金方法・件数等を記載)や共同募金関係の広報紙等を持参し、グループワークにて他市町村の取り組みを詳しく知り、自社協流にアレンジして取り入れていただくなど、募金方法の見直し、募金実績向上等につなげていただくことを目的に実施しました。

②前半は、社会福祉士会の実習指導者講習会講師も務められていた古賀市社協の多田氏より、「実習生との関係の作り方、スーパーバイズのあり方」について講義を受け、後半は実習生と指導者との部屋を分け、情報交換会。指導者ももちろん、実習生も、近隣社協の実習生に刺激を受けています。実際に、この会のうち、実習記録の書き方がよくなった、質問を積極的にするようになるなど、実習生に変化が見られます。

3. 先進地視察研修(年1回)

今年度は7月24日(木)~25日(金)に、①広島県・尾道市社協(ポラシティア連絡協議会との協働、毎日型サロンについて)、②広島県・福山市社協(生活困窮者自立支援の取り組みについて)へ伺いました。

①商店街空き店舗にてボラ連主体で行われている、毎日型の「荒神堂サロン」へ。曜日ごとに担当団体が変わり、誰でもいつでも入っていいサロン。地域のサロンには行きにくいという男性高齢者、認知症の人、不登校やひきこもりの方など、様々な方を受け入れています。2階は、障害者の生活訓練として活用し

たり、生活困窮に陥った方を一時的に泊めたこともあるとのこと。

広島に向かうバス内にて、参加各市町のボラ連活動について情報交換を行うなど、有意義な時間を過ごしました。

②毎週金曜の午前に福祉センター内にて行われている「きんようきっさ」(ホームレス・元ホームレスの方が来られ、軽食をとりながら交流)の活動について、活動中の様子も見学しながら説明を伺いました。その他、フードバンクと連携して保存食などをストックし相談者などに渡していること、生活保護世帯の学習支援の必要性(社協が受託などについても伺い、いよいよ来年度から各市町で取り組みを実施しなければならぬ「生活困窮者支援」の具体的な活動について学ぶことができました。

4. 会員交流事業(年2回)

夏にパーベキユ、冬にポウリング&忘年会を実施。パーベキユは家族参加OK(子どもさんも一緒にわいわい盛り上がり、何かあったら電話一本で連絡しあえる、顔と顔の見える関係づくりにつながっています。

●福岡のいろいろ!

1. 社協ワーカーとして切磋琢磨、モチベーションアップできる。

所属社協だけでは、職員数自体が少なかったり、先輩と年が離れていた、同年代の仲間と競い合うことができないことがあります。福岡は若手ワ

カーが比較的多く、集まって話をするだけで他社協ワーカーから刺激を受け、気持ちが高まります。

2. 近隣社協とのつながりができる。

業務に役立てられる。

研修等を通じて顔見知りになり、情報が出し合えるとき、同じ職場内では聞けない内容の悩みが出たときなど、気軽に近隣社協の方に聞けるようになりま。特に、一泊研修では同じ部屋で飲んだり、泊まつたりすることでプライベートな話もいろいろとでき、より深い人間関係が築かれていきます。ときには、窓に発展することも!

●課題もあります!

1. 県地職連との差別化

県地職連でも様々な課題について研修企画がなされています。今後は、「福岡ブロック」という地域特有の課題は何か考え、それに対する研修を企画することなどが求められてくるのかもしれませんが。

2. リノの活用

役員からのお知らせが中心になってしまっています。ワーカー同士で自由に意見交換したり、自社協事業の案内をしあうなど、もっと積極的に活用していただきたいですね。(ニコ：ウェブ上付箋紙で、福岡県内社協の方はパスワードを入れればログインできる)

●最後に、今後の抱負?

これからは、もっと若手目線での? 自主企画を積極的に出していきたいですね。また、いち社協では取り組みが難しいニーズに対し、筑後地区のように近隣社協合同での取り組みを検討するなど、長年培った福岡のネットワークを生かす活動も必要かと思えます。

現在、制度横断的、あるいは制度では対応できないニーズへの対応に皆さん日々追われていることと思います。地職連も、地域福祉担当職員の枠を超えて、様々な職種が参加できるものに変わる必要があります。筑後市社協のト部君がよく言われる「オール社協」ですね。実は、そういう意味でも「地域福祉活動職員連絡会」という名称も変えてはどうかという話も出ています。

いち社協では、担当者が1人だけで相談できる人が周りにいなかったり、業務量が多く、職員研修をする余裕がない、という現状もあると伺います。皆さんの業務に役立つ研修を行うことで「人材育成」の場にもなればと思っています。

社協の仕事は、ネットワークそのものだと思います。ワーカー仲間がたくさんいると、いろんなところで助けられたいです。私は、他市町村の視察先に困ったとき、福岡県や県地職連で知り合ったワーカーさんに電話をかけ、お勤めの視察先を教えてください、講演会講師のあてがなくて困ったときに、紹介していた

だいたり助かっています。広島の水害支援に行った際は、多忙な現地社協に状況を伺うのは気が引けますが、地職連で知り合えた県内先輩ワーカーが現場に入っており、その先輩に状況を教えていただくことができました。

皆さん業務多忙で、なかなか出にくいときもあると思いますが、可能な限り福岡県や県地職連の勉強会等に積極的に参加し、人脈を広げ、ワーカーとしての力量を高めていきましょう。それが、それぞれの地域で、いつか、何らかの形で、住民の幸せにつながるはずですよ。

編集後記

一 編集者のつぶやき

吃音当事者である青年の話です。

「高校の時、授業中の発表が成績に反映される教科がありました。

しかし、どもつたらどうしよう?、授業の妨害と思われるのでは?、同級生に変な目で見られるのでは?と、自ら手を挙げることはできませんでした。

そこで、思い切って吃音のことを先生に相談しました。しかし、「ただしゃべりにくいだけだろ?」と軽くあしらわれました。吃音は私にとって一生の問題なのに...と、ショックでした。

そんな彼は、「吃音に対する理解が広がってほしい」と言います。

しかし、「私が吃音であることは知ら

れたくない。隠していたい気持ちもあるのです」とも言いました。

思い切った相談しても受け止められなかった経験がそんな気持ちにさせたのだとすれば、これは大きな問題です。

「どうせ分かってもらえない」と思われてしまうと、困った時に「困った」と声をあげることすら、あきらめてしまうのでは...と思うからです。

これは吃音に限らず、その他の福祉課題にも共通します。大切なのは本人が感じる・生きにくさ。そして周りが、それを大切な問題として受け止めること、とても大切だと感じました。

その意味では、社協ワーカーがいち早く福祉課題に気づき広報し、多くの方にそのような課題があるのだと知ってもらうことは大事だと思いました。(U・Y)

★発行者

福岡県地域福祉活動職員連絡会

★事務局

〒811-2202

福岡県糟屋郡志免町大字志免451番地1

TEL 092-937-3011

FAX 092-936-9067

E-mail chiiki02@shime-shakyo.or.jp

URL http://www.geocities.jp/f_chishokuren/